

プログラム

ヴァイオリン： 石田 泰尚
ピアノ： 岡本 知也

ドヴォルザーク：
4つのロマンティックな小品
op.75(B.150)

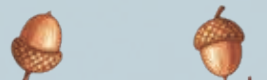
1. アレグロ・モデラート
2. アレグロ・マエストーソ
3. アレグロ・アパッショナート
4. ラルゲット

ドヴォルザーク：
ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ
op.100(B.183)

- 第1楽章 アレグロ・リソルート
- 第2楽章 ラルゲット
- 第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ
- 第4楽章 アレグロ

スメタナ：
わが故郷より
チェコ語原題：Z domoviny

1. モデラート
2. アンダンティーノ



シューマン：
3つのロマンス op.94

1. Nicht schnell(速すぎずに)
2. Einfach,innig(素朴に、心を込めて)
3. Nicht schnell(速すぎずに)

ブラームス：
F.A.Eソナタ
第3楽章 スケルツォ、アレグロ

ブラームス：
ヴァイオリン・ソナタ第3番 op.108

- 第1楽章 アレグロ
- 第2楽章 アダージョ
- 第3楽章 ウン・ポコ・プレスト・
エ・コン・センチメント
- 第4楽章 プレスト・アジタート

プログラムノーツ

本日のリサイタルのプログラムを作曲者の生年順にならべると、シューマン1810、スメタナ1824、ブラームス1833、ドボルザーク1841となります。シューマンとブラームスはドイツ、スメタナとドボルザークは隣国チェコ出身で、それぞれ先輩が後輩に影響を与え、また国を超えての影響もあって、ドイツロマン派の音楽が、チェコ(ボヘミア)のメロディーメーカーの二人を育てたわけです。当時、音楽の後進国であったチェコでは、スメタナを先頭に自分たちの音楽が重要だという意識から、ナショナリズムが勃興し、それは国民楽派とよばれるようになりますが、ドイツロマン派の雄であるシューマン・ブラームスの美しい音色と旋律が、民俗音楽の宝庫である東ヨーロッパに移植されて、音楽史をひとつ前に進めました。(磯部記)

ドヴォルザーク：4つのロマンティックな小品op.75(B.150)
この曲は2台のヴァイオリンとヴィオラのための三重奏曲op.74として作曲されましたが(1887)むずかしすぎたため、ミニアチュールと呼ばれたアマチュア向けの三重奏曲op.75aに作り替えられ、さらにヴァイオリンとピアノのための作品として編曲されて、これをドヴォルザークは「ロマンティックな小品集」op.75と呼びました。名前のとおり、ロマンティックな小品集です。

ドヴォルザーク：ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ
op.100(B.183)
この曲はドヴォルザークの15歳の娘と10歳の息子のために作曲したヴァイオリンとピアノのための作品です。ドボルザークは1892～1895の間、音楽院院長としてニューヨークに滞在し、アメリカ時代と呼ばれていますが、この間、有名な交響曲「新世界より」op.95、弦楽四重奏曲「アメリカ」op.96、チェロ協奏曲op.104を作曲しています。この曲は作品番号を見てあきらかなように、アメリカ先住民族の民謡や黒人霊歌に靈感を受けた旋律主題が使われており、若者向けとは言え、ソナタと呼んでも差し支えない、内容を持っています。

スメタナ：わが故郷より
スメタナ(1824-1884)は「チェコ国民楽派の父」と呼ばれ、祖国の自然や民族文化を音楽で表現した作曲家です。1870年代後半から両耳の聴力を失いながら創作を続け、有名な交響詩「我が祖国」を1874～1879年に作曲しました。1880年、すでに聴力を失っていた晩年に作曲された「わが故郷より」は、「我が祖国の室内楽版」というニュアンスを持つ楽曲として理解され、スメタナ自身もこの作品について「演奏会用というよりは、家庭的な場面(サロンや家庭音楽会)で楽しむための小品」という趣旨を語っており、大掛かりなコンサート用というよりは、親密な場での演奏を想定された性格の作品です。